

特集
おもしろ
研究・先生V

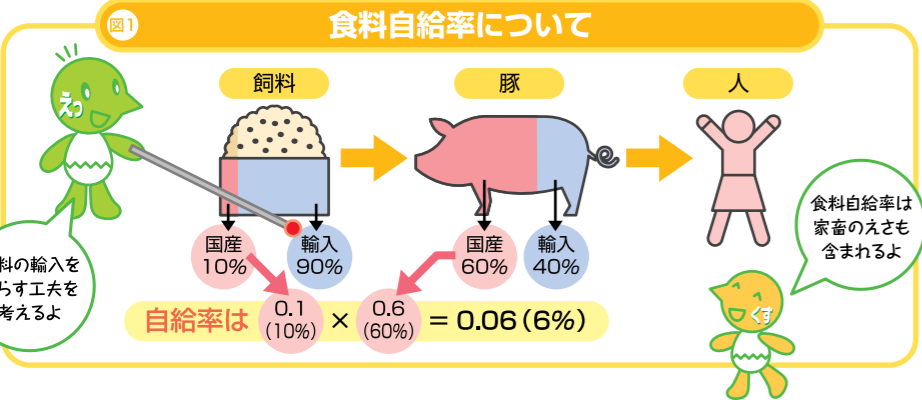
新たな舞台でもう一度！～食品廃棄物リサイクル～



三重大学人文学部・准教授
森 久綱 Mori, Hisatsuna

三重大学内第一食堂

食品廃棄物は
どのくらいでしょうか？



◎食料危機はすぐそこ！

中国をはじめとする国々が、経済発展にともなって、食料輸出国から輸入国へと転換したことから、世界レベルで食料の奪い合いが起きています。Lester Brownが1994年に『Who will feed China? (誰が中国を養うのか)』を出版してから15年、まさにそこで懸念された問題が現実となっています。

◎食品廃棄物リサイクル

日本の豚や鶏の約60%は国産ですが、豚や鶏の飼料自給率が10%であることから、肉類自給率は6%ということになります。一般的に自給率とは人が食べる分だけと思われるがちですが、実際は食材となる家畜の飼料も含まれています(図1)。これが日本の食料自給率40%という低水準な要因の一つであり、食料危機の影響を直接受けます。一方で、日本では年間2000万トン以上の食品廃棄物が発生しています。これは家畜飼料として日本に輸入される穀物とほぼ同じ量になります。

現在、このような食品廃棄物に対して、どのように対処すべきなのかが問われています。食べ残しなどの無駄をなくすことはもちろん、飲料や加工食品などの製造段階で必然的に発生してしまう食品廃棄物を家畜飼料として利用することが、飼料輸入を削減し、いいては食料自給率の向上につながります(図2)。

◎リサイクルの問題点

2001年「食品リサイクル法」が施行されたことを契機に、食品廃棄物を家畜飼料として利用する動きが活発化し、様々な取り組みが行われるようになりました。製造過程のお菓子の屑が豚の餌になる例もありますが、問題点も多々あります。

その一つが経済性の問題です。食品工場から排出される食品廃棄物は水分が多いため、そのままで輸送や保管を行うことは難しく、脱水、乾燥などの工程が必要になります。また、食品廃棄物の排出量は製品需要の影響を受けて変動するほか、家畜飼料として栄養分の調整が必要で、大手食品メーカーと大規模酪農・畜産農家での取り組みが中心となり、中小食品メーカーや酪農・畜産農家は、取り組むことが困難です。そればかりではありません。遠隔地への物流が中心となることから、物流コストも問題となっています。

◎理想のカタチ

食品廃棄物の問題は、経済性を追求した大量輸入・大量加工といったこれまでのやり方が生み出した結果です。この問題を解決するためには、食品消費だけでなく廃棄を含めた社会システムのあり方に注目する必要があります。「地産地消」という言葉がありますが、地域で採れた農産物をその地域で消費し、その地域で食品廃棄物をリサイクルするという資源の循環が必要となってくるでしょう(図3)。

